医療における実証の大切さ

発展途上国における計画的医療環境改善

1977年に日本大学歯科学部を卒業後、歯科医となった宮田隆氏に大きな転機が訪れたのは1991年。内戦終結直後のカンボジアを訪れた時であった。内戦でほとんどの人材を失い荒廃したヘルスサイエンス大学の実情を見て支援を決意。その復興のために休暇を返上し、約2ヵ月に1度のペースでカンボジアを自費で訪れ、同大学の教員や学生の教育に力を注いだ。その後、1996年に明海大学歯学部教授に就任、1998年から明海大学病院病院長を務めるものの、本格的に国際医療貢献・教育支援に取り組むため、2002年に大学を早期退職した。同年から特定非営利活動法人歯科医学教育国際支援機構を設立し、自らカンボジア、ラオス、メキシコ、東ティモールを中心に医療・教育支援を続けている。

宮田氏の活動目的は単なる医療ボランティアの枠に留まらず、「歯科」という医療分野が保健衛生上、非常に重要な役割を担っていることを証明し、計画的に各地の医療環境改善に努めることにあった。そのためにカンボジアでは、国内で累計2，000名にも及ぶ住民の歯科検診と心疾患をスクリーニングし、歯周病の進行度が心疾患や酸化ストレスの発症に強く関与していることを立証。その結果から導きだした歯周病予防プログラムはカンボジアの保健省に採用され、現在もカンボジア住民の健康管理に寄与している。

人材育成も重要と考えた宮田氏は、カンボジアのヘルスサイエンス大学で教鞭をとり、2005年にカンボジアで初となるカンボジア政府認定の歯周病専門医20数名を育成。現在は教え子たちが、その事業を継承している。同大学の学生に過疎地医療を体験させる*1SERTAには私財を投じ、8年間支援してきた。その他、東ティモールでは独立時の内戦で霧散した歯科看護師を再集結させ、各地のヘルスセンターに職場復帰させた活動が政府からも高く評価された。さらに、デンタルナース制度がなかったラオスでは、看護師への歯科医療の技術移転に成功し、この事業は現在も継続している。同時に現地での人材育成のため、同国保健省が認定する歯周病のマスターコースを指導している。

宮田氏の活動は日本国内でも評価されており、2004年以降、東京都やトヨタ財団から協力を得て展開され続けている。また、独立行政法人国際協力機構（JICA）の「草の根技術協力事業」として3回採択されている。さらに、外務省の日本NGO連携無償資金協力にも5回採択された。

*2EBMに基づいた宮田氏の20年以上にわたる医療貢献活動と教育支援活動は、宮田氏一人の活動としてではなく、その意志を受け継ぐ後継者が各国で活動を続け、各地の医療環境の改善に寄与するという形でその成果を証明している。それは、これからの発展途上国における保健衛生活動の目指すべき姿と言えるだろう。

*1　Students Experiences Tour in Rural Areaの略
*2　Evidence-based medicine（根拠に基づく医療）の略

> ラオス、カムワン県にて患者さんを診察する宮田氏

> カンボジア・ヘルスサイエンス大学において歯周病専門医に対する歯周外科のデモンストレーションをする宮田氏

宮田 隆（みやた たかし） Takashi Miyata
特定非営利活動法人歯科医学教育国際支援機構 理事長
President, Non-profit Organization of International Support for Dental Education

推薦者
鴨井 久一
日本歯科大学 名誉教授、公益財団法人8020推進財団 理事、NPO 歯科医療情報推進機構 常任理事
石川 烈
東京医科歯科大学 名誉教授、東京女子医科大学先端生命医科学研究所 特任顧問

1950年埼玉県生まれ。1977年日本大学歯学部卒業。同大学の歯周病学教室を経て、1996年から明海大学歯学部教授に着任。1998年から明海大学病院病院長を務め2002年に早期退職。同年に特定非営利活動法人歯科医学教育国際支援機構を設立し、以後国際医療貢献活動に従事している。その活動の起点となったカンボジア以外にもラオス、東ティモール、メキシコなど、多くの国で活動を展開。カンボジア、ラオス、中国、メキシコの大学で教鞭をとった。「医・歯学生のための国際医療貢献」（ヒョウロンパブリッシャーズ）、口腔と全身疾患（クインテッセンス出版）、歯周病のストラテジ―シリーズ全3巻（医歯薬出版）など著書も多数。